

# コロナ禍に 癒やしと成長

新型コロナウイルス対策の外出自粛期間などに、花の種を贈る試みが各地で行われ、人の心に癒やしをもたらしている。企業や学校など業種や立場を超えて取り組まれているのが特徴。関係者の「ほんの気持ち」が積み重なり、「災い」と表現される現状を、成長や縁をつむぐ機会へとつなげている。  
(加星宙磨)



受け取った種や、育った植物を手にする京都女子中学の生徒ら

「お花の種はいりませんか？」。兵庫や大阪の物件を扱う不動産会社「ウィル」（兵庫県宝塚市）は、政府の緊急事態宣言発令後の4月末、顧客向けメールマガジンでこう呼び掛けた。

## 育てる過程好影響

約10種類を用意したところ、約20世帯が希望。フウセンカズラを贈った家族からは「風船部分が見られて子どもともども大満足」との感想が寄せられ、サルズベリを育てた顧客からは「朝夕と水をやるのが楽しみ」とのメールが届いた。

企画した同社の岡田洋子参事は「自粛以外にできることを考えた時、何かを育てる過程で喜怒哀楽を感じ、学ぶ素晴らしさを体験するのは、人にいい影響

## 花の種贈る試み各地で

を与えると思った」と話す。

種は、野菜や花を育てている自分の家族から随時譲り受けており、秋まきの種の配布も決定。郵送を希望した世帯は1・5倍に増え、岡田参事は「交流ができてうれしい。こうしたやりとりがあると、お客さまも相談事があった時にこちらに連絡しやすいのでは」と考えている。

## つながりを感じる

京都や大阪などから生徒が通う京都女子中学(京都市東山区)では5月、休校期間が延長される中、新入生約200人向けに約20種類の種を交ぜ、小さじ1杯ずつに分けて郵送した。

中1主任の山本涼子教諭は「宿題やお願いはかりではなく、受け取ってわくわくした気持ちになるものを同封したかった」

と狙いを説明。新入生と対面できない中、手紙やメールでやりとりする際の共通の話題として、絆を強められるようにするのも目的だった。

70人ほどから発芽報告が寄せられ、学校のホームページに画像などを掲載。児玉季子さん(13)は「自粛中、会って話せなくても、みんなとのつながりを感じられた」と振り返った。

何の花かすぐに分からないようにした仕掛けは、生徒の学びも促進。谷村美咲さん(12)は、同じような種から多彩な花が咲いたのを通して「最初はどれも似ていても、それぞれの個性や生き方がある」と実感。堀井奏花さん(13)は、小鉢から花壇に植え替えるとより成長した経緯から「新しい環境が成長につながる」と感じていた。

## 異業種連携に発展

「花の種を贈る」という共通項が、業種を越えた連携にも発展した。

8月にウィルの岡田参事が京女中の取り組みを知ると、春菊の種の提供を提案。人の名前を擬人化して絵を描くアーティストの今元富記子さんにも協力を呼び掛け、種を入れる袋に貼るオリジナルイラストも作成した。

「京女」の文字を愛らしい女の子で表現。同校の教育理念を踏まえて「育つ 育てる」の文字を入れた。今元さんは「コロナ禍で、心が痛くなる悲しいニュースが流れる中、誰かのところにおきをおき、自分にとっておきのように大切に思える心が育ってほしい」との願いを込めたという。

山本教諭は「小さな種がこれほど広がりを見せるとは思わなかった」と話し、生徒たちには「縁に感謝し、人とのつながりを大切にしてほしい」と思いを込めている。